

2014 政治を学び合う スタディツアー「鳥取県智頭町」に見る自治のすがた。

東京大学公共政策大学院 公共管理コース1年 伊藤香苗

1. 智頭町：関西都市圏から比較的容易に到達できる豊かな山林。

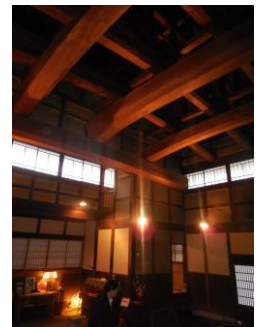


本書は早稲田大学「政治を学び合う」の課外授業として開催された鳥取県智頭町へのスタディツアー（平成27(2015)年3月18日（水）～平成27(2015)年3月20日（金））における気づきと、そこで得られたこれからの自身の研究課題について言及するものである。智頭町は鳥取市の南東部に位置し古来東西道路の交わる交通の要所、宿場町「智頭宿」として栄え、町の93%を占める森林は往時日本の十大林業地とも言われたが、1960年代から過疎化に悩み現在の人口は往時の半分の約7,200人。2004年の鳥取市との合併協議を経て2008年に当選した寺谷町長が観光カリスマとして町の名をアピールすることに成功し

ている。到着した鳥取空港は鳥取随一の観光地鳥取砂丘や鳥取市街まで車で10分程、降り立つと海の香りがする。乗り込んだ車は幹線道路沿いに広がる郊外地帯をそのまま40分南下を続け、特に山間部に着た印象もないまま智頭町中心部に到達した。高台からは山間にある町というより、山々に囲まれながらも、川沿いの平地を縫って町・集落が連続して発達した様子が観察できる。1994年に開通した智頭急行や鳥取自動車道(2009年)を利用すれば大阪までのアクセスは2時間程であり、実際、下記「森のようちえん」は鳥取市内までの送迎サービスを行っていることと聞いた。観光を切り口とした町おこし案には有利な地の利であろう。

2. 四期目の寺谷町長。余所者や新しいアイデアを積極的に受け入れる土壌を内外にアピール。

前述の寺谷町長は全国でも比類ない銘木をふんだんに使用した地元の名家「石谷家」を観光の目玉と据え、集客と知名度向上に成功した。当時無名の当住宅を本邦初公開した期間中5日で15,000人ほどの来場があったが、その効果の重要性は数字ではなく、過疎で冷え切った住民の心に「やれば出来る」という実感をもたらしたことだと言う。智頭町では1996年に住民が進む高齢化を憂い、マチと誇りの存続を目的とした地域づくり運動として「ゼロ分のイチ村おこし運動」が立ち上がっているが、この活動は①住民が自分のたちの手で暮らしを築く自治の姿 ②地域経営マインド ③都市や外国人を含んだ交流・情報発信を強く意識し、戦略的な構想を持っていた。時を経てこれが寺谷町政とアピール手腕で石谷家住宅という観光の目玉を生み出し、住民主体の積極的議論を生み出す「百人会」の基盤となったことが推測できる。智頭の観光事業への投資に華美さはない。観光客向けの建物はほぼ目に入らず、地元の方が通う昭和な雰囲気のお店で地域主婦手作りの「セラピーランチ」食べていると、「民泊」「地産農産物」など地域の資産を掘り起しながら、住民の参加を原資としている実態が如実に感じられる。



3. 豊かな森林を毎日移動しながら子供を屋外で保育する森のようちえん。コンセプトに共感し、移住を考えさせる効果。



雨の日も雪の日も子供に戸外で活動をさせ、森の恵みと大自然からの学びを享受せんとする森のようちえんが人気で二園目を開業している。補助金を得ながら一園での保育は30名までというマイクロ事業ではあるが、この園は10名の正規雇用を生み出し、入園を目的として移住した世帯も年間20件ほどの実績を積んでおり、人口数としては毎年最大100名の若年人口を増加させる効果を出している。主催者の西村氏によると、補助金を前提とした経営に賛否はあるものの、効果を肯定する風の中、フリースクールの開設や付帯的なサービスの拡充が「百人会」で検討されているという。入園を希望する両親の属性はクリエイターなど一定の特徴が見える。行政との連携も良好の様だが、反面希望に沿う住宅の斡旋が出来ず移住を断念するケースもあると言う話に、空き家対策の現実の難しさが垣間見られる。

今回の視察を起点に、筆者はこの町の自治の歴史的な経過や合意形成の取り方に興味を抱き今後調査を続けたいと感じた。最後に、本ツアーを充実させるべく奔走してくださった智頭町役場企画室主任の芦谷健吾氏と登壇者各位、及び企画・引率いただいた早稲田大学の村田信之先生と大川ドリーム財団のご関係者各位に心からの感謝を述べて報告レポートの終わりとしていたい。